**大原の小径**

大原女まつりは毎年5月中旬に開催されています[注：この祭りには様々な日付があります。確認していただけますか？寂光院から三千院までの約2キロの道のりを、伝統衣装を着た地元の女性達が行列します。

女性達は、薪を売りに大原と京都の古都との間を行き来した村民が歩いた道のりを再現しています。女性は、わらで作った円形の敷物をクッションにして、長さ最大2メートルの薪を頭にのせてバランスを取りながら歩きます。

地元の言い伝えによると、女性達はそれぞれ、頭に60 kgの薪をのせて京都まで2時間歩いたそうです。また、周囲の丘の中腹から集められた木材を積んだカートを引っ張る男性達も一緒でした。彼らは京都で購入した新鮮な魚などの品物を大原に持ち帰りました。

この行商は室町時代（1336-1573）に始まり、明治時代（1868-1912）まで続きました。熱源と照明用にガスが用いられるようになると、この行商はなくなりました。

祭りの間、女性は時代ごとに変化したさまざまな服を着ます。袖が細く、腰より上はたっぷりとしており、通常の着物よりも短い膝丈の着物が典型的な衣装です。レギンスを付けてわらで編んだ草履をはいています。

伝説によると、この形の作業服が最初に登場したのは、1185年に寂光院に入寺した建礼門院皇太后の侍女であった阿波内侍の影響によるものとされています。